彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻四の本文の位置づけ

中根千絵

一、はじめに

論者は、『説林』五三号において、彦根城博物館所蔵「今昔物語」（全巻、表紙の題には「今昔物語」と書いてあるが、内題には「今昔物語集」とある。）の紹介を行ったが、その際、本の空白部分の分析、流布本系共通脱文の分析から、彦根城博物館所蔵「今昔物語」は、内閣文庫本Bに近い流布本系の本であり、内閣文庫本Bより良い本であろうと論じた。[1] しかし、その位置づけが正しいかどうかは、諸本との一語一語の比較を経て、初めて、立証されるものである。巻一については、先に論集で分析を行い、彦根城博物館本は内閣文庫本Bとのみ一致する箇所が多く、これは、『説林』五三号で論じたのと同じ傾向であるが、旧日本古典文学大系の底本である東大本甲や東北大本、野村本とのみ一致する箇所もあり、彦根城博物館所蔵「今昔物語」は、流布本系諸本（内閣文庫本ABC、東大本乙）と古本系諸本（東大本甲、東北大本、野村本）の間の状態を有する希有な本であるということを述べた。[2] 巻二の場合は、鈴鹿本という原本に近い本が残っているせいか、古態を残すとされる東大本甲、東北大本、野村本と一致する箇所は非常に少ないという結果が得られた。[3] 巻三では、特に、野村本が流布本系と古本系との狭間で揺れている様を見てとることができた。また、様々な要件から、流布本系は、校訂本文を目指した書物群ではなかったかと推測した。但し、

彦根本のように、中間的な表記を有する書物の場合には、いまだ、そのどちらとも見定めがたいとし、今後、さらに、巻ごとの分析を続け、彦根本の性格を見極めると共に、古態本と流布本の総合的な分析を行っていきたいとした。(4)

従って、巻四についても引き続き、彦根城博物館所蔵『今昔物語』の本文を他の諸本と比較することにより、彦根博物館所蔵『今昔物語』巻四の位置づけを試みることにしたい。但し、諸本の収集は、いまだ、その途上にあり、旧日本古典文学大系『今昔物語集』の校異と頭注(5)から必要な部分を抜き出す形で、諸本との比較を行うこととする。

二、彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻四の本文異同

凡例

一番上の段は旧日本古典文学大系のページと行、次の段は彦根城博物館所蔵本の本文、次の段は彦根城博物館所蔵本と同じ本文を持つ本の種類である。(但し、異体字などの字形が異なるものについてはこれに含め、その都度指摘した。)★印は彦根城博物館所蔵本独自の部分であり、その部分については諸本の例を示した。旧日本古典文学大系に載る考察は必要に応じて「」に入れて付した。

各本の略語は次の通りである。

底—旧日本古典文学大系『今昔物語集』の底本(東大本甲)【旧日本古典文学大系『今昔物語集』の底本が現在の諸本のうちの古態本にあたると考えられることから、底の字を使うことで、それが一見して明らかとなるようにした。】

北—東北大本　野—野村本　以上古本　乙—東大本乙　A—内閣文庫本A　B—内閣文庫本B　C—内閣文庫本C

以上流布本　東大本甲を除く諸本—諸

彦—彦根城博物館所蔵本

巻四第一話

二六八 4　座シテ　大　流布本系統「坐」に作る

10　河　底北野

11　答ヲ　B

二六九 7　座ニ　底北野

巻四第二話

二七〇 6　恠ムテ　北野AC

12　毒ノ如シ也　底北

12　甘露ノ如ク也　諸（Bの也はナリ）

14　可有ルト　AC

巻四第三話

二七一 6　懐ヌル　北野A

10　掴ル　底北野ACB（野ACの掴は木偏、Bは手偏＋回に作り不審紙を押したり）

11　取賛テ　★「取賛ヘテ」底北野大（底野は賛に替と傍書）「取替ヘテ」AC「取替テ」B

賛は替の異体字

13　人ニ人　B

15　物モ不見ヌ　底北AC（北はヌにスと傍書）

15　ラル程ニ　底北（北はラにア歟と傍書）

二七二3　菌ニ　底北野ABC（「底北野Aの菌は変　即ち国構の中は米」）

6　不誤ス后ヲ　諸（野はスにヌ歟と朱傍）

12　彫タルソラ　底北野

16　尋取テ　底北野AB（「底野の尋は変　上部を日に作る」、北は尋の字体不整、北野傍訓タツネ）

二七三8　礼拝　底北野AC（「底の拜は変　即ち偏旁とも羊、野はその変」）

巻四第四話

二七三15　継母テソ有リケル　底北野

16　コト　★「事」ABC「力」（コト）底北野

二七四5　有ヌヘシ　底北野

6　徳叉尸羅國　底北野

12　旃基羅　底北野ABC（茶　北野Cは恭の上部＋木、底は恭の上部のみ、Aは恭の上部＋土）

16　烏ノ嘶ニ　底北野（象は異体）

二七五4　何コソ　諸

15　本如クニ　底北野

二七六7　兎シ　底北（兎は異体）

巻四第五話

二七六15　地獄入レツ　　底北野A

二七七1　地獄ニ可入ト　　底北野A

5　前ノ時ニ　　諸大「意通じがたい。或はソノの誤りか。」

7　入ラセ可給シト　　底北野

8　下時ニ　　底北野

巻四第六話

二七八6　女ノ云ク　　底北野

11　辞申サムカト　　北野（野は傍訓なし）

12　潭莪ノ　　底北野AB（「底北野Aの薄は変　即ち氵＋溥」、野はそれに薄歟と朱傍）

15　ニコ、ニ　　諸（北はコ、ニにフ、ニと傍書）

15　咲ユテ　　野A

二七九1　足ヲクテハ　　AB（Bはクの左傍に朱圏点）

1　交ヱテ　　C

5　比丘ニ　　諸大「比丘ノ」C

7　集リ畢レヌハ　　底A

9　碎ク如シ　　底野A

巻四第七話

二七九16　思エ給ケレハ　底北野
二八〇4　聆油ヲ　野ＡＢ
10　泛之給ヌレハ　ＡＢ（ＡＢは之がシ）

巻四第八話
二八一8　世挙キ　底北野Ａ
11　成ヌ　底北Ａ
13　花髣ヲ　Ｂ
14　懸タリ　底北野Ａ（底北野Ａは頭）
二八二8　佛ノ御有様　ＢＣ（ＢＣは仏）

巻四第九話
二八三5　比兵共　北野ＡＣ
8　者メリト　諸（底野Ｂはメにナ歟と朱傍あり）
11　交座　大「交坐」流布本系
14　今一人古老ハ　諸（Ｂは人の下にノ歟と朱補）
15　掻消様　大　内閣文庫本Ａ、Ｃ本は「消」を「消ス」に作る。
「中世かな文学における常套句の一種。」
16　外ノ力（コト）　底北野Ａ（北は傍訓なし）
二八四3　坐ヌレ　★「坐メル」底北大（底はメルにヌレと傍書）「坐スル」野「坐メレ」ＡＢ「坐ス

レ」C
4　他ノ力　底北野A（北は力にマ、と傍書）
二八五4　何ニ□　底北野A
4　暁□一字分欠　底北野B（Bは約三字分アキ　本ノマ、と朱傍）
5　七聖財ノ寶ヲ　底北野
7　嗶ル也ケリ思テ　底北野A
13　堕ヌ走ル　底AC（底はヌにティと傍書）
13　翔ノ如シ　底北野（「底北野の翔は変　即ち羊×月」、それに北は翔、野は翔歟と朱傍）

巻四第十話
二八六8　佛ノ三身ソ功徳ノ相　底北野A大「佛ノ三身ノ功徳ノ相」C「佛ノミ身ノ功徳ノ相」B
「内閣文庫本B・Cの三身ノは合理的に改編した後の本文、底本始め古本がソに作るのは、推敲前の旧表現を残したものか。」
12　死ル刈ニ　北野A（「北の尅は変」、北野彦傍訓コク）
14　香シキ　底（ヲと重書してキとしたる如し）
14　寺ラ内ニ　底北野A大（底はラにノ歟と朱傍あり）「寺ノ内ニ」BC
「寺ラ内」の方が「寺ノ内」に比してより緊張感を持つ。」

巻四第十一話
二八七9　聲明□ト　AB（Bは空所に本ノマ、と朱傍）「声明ト」C「聲間明□ト」底北野大（北野

は問みせけち）

「声問明は恐らく声問と声明とのコンタミネェションで、下の欠字は不要なものであろう。」

10　咲テ　諸大「咲フ」B

15　人共　底北野ABC（野の旅は異体、底北はその変）

二八八1　啜ヌ　★「嗟ス」底北野A大（Aは目偏）「明ス」B「曙ス」C

2　ウツロノ　ABC

2　被焉シテ　北野A（野はシにレ歟と朱傍）

9　阿毗ノ達磨　底北

11　被焉テ　★「被焉レテ」大「被焉シテ」底北野A（野はシにレ歟と朱傍）「被焉レテ」C

4　ウツチニ　「被蒸テ」B

6　成リニキ　底北野（底野はチにホ歟と朱傍　ホは古体のかな）

8　仏法ニ　底北野

9　涅槃入給テ後　大　古本、このところ、いずれも略体を使用。

巻四第十二話　底北野

二八八15　十餘歳ニ成ル　★「十餘歳成ル」底北野大「十余歳ニ成ル」AC「十餘歳ニナル」B

16　醫療ヲ以テ　底北野（北は以テの字体不整　以テと傍書）

二八九4　飽満ヌ　底

4　无キマイニ　底北野A（底はイに、を重書）
5　禾シテ云ク　底北野（示は変　底北野　禾に近し）
7　増々ス　底北野（底北野はゝ）
9　問給ヘハ　★「問ヒ給ヘバ」底北野大（「野の問は変」）「間セ給ヘハ」ABC（Bの給は王）
二九〇1　斤時ノ　底北野A（野は斤に片と傍書）
1　物不悪ヌカ　北
3　失給ヒテト　北野AC
4　召シニ遣シツ　底北
6　不背カシト　★「不背カジズ」底野大「不皆カシス」北「不背カシヌ」A「不背シテ」B「不背（ソムカ）ザリシニ」C
「古本のこの本文は、旧表現「不背カズ」が「不背カジト」と推敲されていく過程を如実に示すものであろう。」
7　苦ニ宜ハム　底北野
15　礼斥シテ　諸（底北野　拜の偏は変）
二九一5　其ノ事于今　野C（野の于はやや小字）
6　目出タチ　底北AC（北はチをキと訂す）

巻四第十三話
二九一14　海底ヘ　★「海底ニ」AB大「底海ニ」底北野（底野は顛倒符を附したり）「海ノ底ニ」C
二九二9　可教キ也　C

巻四第十四話

二九二13　山入テ　　底北野A

二九三5　供奉シ給ヒキ　　底野

10　其ノ間国ニ　　底北野（底北野は國）

巻四第十五話

二九四14　二斗　　大「一斗」C

「前記の一斗と合わないが、たいたので、ふえたという感じを強く出した表現であろう。」

14　奉ラムト　　底北野（底野の奉は変　上部にハあり、野は奉と朱傍）

14　驚キ怪ムテ　　大「驚キ怪ムキ」底北野（キに底はテ歟、野はテと朱傍）

「ムは、音便形アヤシンデの撥音の表記。」

二九五1　楾テ　　底北野ABC（「底野の楾は変　木偏」）

5　此ノ飯ヲ　　北

8　三千餘人ノ　　底野北（「底北の飯は変　金偏」）

13　其ノ恩ヲ　　底北

巻四第十六話

二九六15　其時ニ　　北AB

15　舟金ハ　　底野AC

二九七 6　本如ノ　　底北野

巻四第十七話

二九七 15　人乏ミ　　底北A

二九八 1　踏ヘテ　　B

4　身ヲモ々ヲモ　　底北野A

5　面ヲ　　底北A（底の面は異体）

5　事ヲシテ　　AC

10　夜嗟テ　　底北野A（Aの嗟は月偏）

16　免シツ　　ABC

巻四第十八話

二九九 7　放チ任スルハ　　諸（底はルにレ歟と朱傍）

12　不害ス　　底北野

15　或ハ　　底北野（北はハをルと訂す）

4　畜生ソラ　　底北野

5　語リ傳ヘタルトヤ　　B

巻四第十九話

三〇〇 13　鼠ソラ　　底野

14　道ヲ成リ　諸大「道ヲ成シ」C
「ヲは、間投助詞もしくは主格表現の助詞、あるいは成リを成就シの意の他動詞に解すべきか。」

巻四第二十話
三〇一8　集國其郡其郷ニコソ　底北
三〇二1　問云ク　底北野A
4　千歳契ヲ　諸
5　有ラム　北野
6　王難　北ABC
11　无限シ　底北野A（Aは既に限歟と朱傍）
12　噉ヘムトシテ　底野（野はへにハ歟と朱傍）

巻四第二十一話
三〇四5　踏ニ敓サセムト　底
6　奇異　B「奇意」大「意」の正字は「異」

巻四第二十二話
三〇五7　哭ク　★「哭テク」底北（底はテにケ歟と朱傍し　そのケをナと朱訂）「哭ラク」野「哭セリ」ABC「哭ナク」大

8　可遁キ　　底北野ＡＢＣ（「遁　底北野は変」、Ｂは之繞に后）
15　鏡懸タルカ如シ　　底北野Ａ

巻四第二十三話
三〇六9　母ニ娶テ　　底北野
13　耻テ恐レテ　　諸（耻テのテに底はチ歟、野はチと朱傍）
16　住ム　　ＡＢＣ
三〇七1　然レハ只一字分欠　　底北Ａ（底本破損のため不分明）
如シ
1　綾シツ　　底北Ａ（底北Ａの敍は変　綾の変）
2　大天〔以下欠〕　　大　大天〔以下欠〕

一行と約十字空白（巻四第二十三話～巻四第二十四話の間）

巻四第二十四話
三〇七11　觸レハ　　ＡＢＣ（Ｃ傍訓フル）
14　八ウニ也　　諸
三〇八2　然レハコソ　　底北野
4　□ノ所ニ　　大「羅漢ノ所ニ」Ｃ

巻四第二十五話

三〇八　9　廣大ニナム　底北

15　佛法ヲ習ヒ傳ヘムカ為底北野

16　終龍樹菩薩御許ニ　底野A

三〇九　2　□ク　諸大「カクハ」C

「文脈から押せば「(イカデカ) カク」など有るべきところ。」

2　參タル也ト　底北野

5　歩ヲ運ツト　★「歩ヲ運ブト」底北野C大(底はフトみせけち　ツトと傍書あり)「歩メ運フト」

A(メにヲと重書)「歩ミ運ト」B

14　掃キ揮ヒ　底北野ABC(「底野の掃は変　木偏」)

三一〇　3　忝(カヒ)ケナカリ　ABC

巻四第二十六話

三一一　2　甚深ニシテ・　底北野

4　丈夫國　AC

三一二　1　愚也　大　古本は口偏有り、流布本にはなし。「一般的に中世において口を増画することは普通であるが、この字については未だ明証を得ない。」

6　世親菩薩　AC

7　被崇レ給フ　北AC(Aの被崇は傍書)

巻四第二十七話

三一三1 □有リ　諸大「思」C

5 彷ニシテ　底北野ABC（「底北野の徒は変　即ち旁を乏に作る」）

7 待奉ラムト思フト　底北野

巻四第二十八話

三一四15 礼拝シ　底北野ABC（「底北野の拜の偏は変　底北野ABCは拜」）

16 散シ奉ルニ　底北野

三一五5 衆生ノ中ニ　底北野

6 若シ我レニ　底北野

巻四第二十九話

三一五16 駱駝　底北野AB（底北野Aの駝は異体）

巻四第三十一話

三一八16 非ヌ檥ニ　底（底彦のヌの字体メに近し）

三一九3 乗セテ　底北野

6 首被斬レム　底北野

6 益无キ事也ト　底北野

8 食ウツ　底A（底はウを朱訂せんとした形跡あり）

9　不死サル薬ヲ　底北野

三二〇9　牙ニ　底北野A

巻四第三十二話

三二一3　死ヌル　底北

3　皷ニ　底野AB（「底野Aの皷は変　即ち偏は敗の偏に似たり、」野は皷歟と朱傍）

5　病立チ所ニ　底北野

7　日晩レヌ　底北野ABC（晩　Bは異体、底北は月偏）

9　思ヒ給ヒ乍ラ　底北野

14　死ヌル　底北A

三二二1　大后ヲ　諸大「大臣」C

「皇后の敬称だが、前の文にはこのことが見えないので疑問である。」

巻四第三十三話

三二二16　突スヘテ　大「突スヘシ」B

「「突スヘテ」で強いて校訂する要もあるまい。」

巻四第三十四話

三二三9　金ヲ持タリ　底北野

14　投入レ給フト　底北野

15　取マシト　野（マは古体のかな）
16　思シヤハ　底北野（北はヤの字体セに近し）
三二四2　身貧シカラム人　底北野

巻四第三十五話
三二四7　耕　底北野ＡＢＣ（耕の偏　底は禾、野Ａはネに作る、野は耕歟と朱傍）
9　有メレト　底野
16　行　★「行テハ」底大「行テ」野ＡＢＣ（野のテは古体のかな）「行キ」北底Ｂ
三二五1　逗入テ　底（底はウにヲ歟と朱傍）
1　芋ウ縯テ

巻四第三十六話
三二六9　我カ力少シ弱シ　底北野

巻四第三十七話
三二七6　極日ニ　諸（極にＣ傍訓キハ）
11　海人其頻ニ　底北野Ａ（底は其みせけち）
11　魚ヲ寄ス寄ルニ随テ　底北野（底は寄スの寄みせけち、野は寄スに朱傍点を打ち寄みせけち）
三二八1　耽テ　底北野

1　化作シ給ヘリケル也　AC

巻四第三十八話

三二九3　雨日ヲ　底北野（雨に底は両欺、北は両と傍書）

4　居ヌルニ　底A

巻四第三十九話

三二九10　達覩罪川　底北野

16　造奉ラムト　底北野（底は破損のためラムト不分明）

巻四第四十話

三三〇12　美麗　底北野

野ABC

12　成長シテ　底北野A（北は限に衍字イニモアリと傍注）

14　事无シ限然ヘル間　底北野AB（底北野Aの无みせけち　抹消符の口左右に有りて一見文字のごとし、北は衍字イニモアリと傍注、Bは口×兎に作り不審紙を押したり、野Aのヌはスに近し、Bはス）

三三一2　遂ニ无不死ヌ様　底北野

7　形チ有様ノ　★「可宛シ」C「可宛レ」A「可宛」B「可充シ」底北野大

12　可宛シ　底北

14　汝ヲ免シテハ

三三二14　花法ノ　　底北野（顚倒符を附したり　北はイニモと傍書）

巻四第四十一話

三三三2　閻魔王　　底北野ＡＢＣ（底野の閻は異体　即ち門構の中は伯）

6　生セリ　　底北野

11　尋ヌルニ　　野Ａ

三三四5　不思ルカ　　諸大　攷証以下「ト」を補ってあるが、諸本には見えない。

5　敢テ　　ＡＢＣ

三、おわりに

『今昔物語』巻四の本文の異同を見ると、彦根城博物館所蔵『今昔物語』と同じ表現を多くもつのは底本の東大本甲と東北大本と野村本である。すなわち、古本系諸本との一致度が高い。これまでの巻では、内閣文庫本Ｂの表現が彦根城博物館本の表現と一致する箇所が多く、それは、空白などの形式[63]と同じ傾向にあった。しかしながら、巻四の場合に顕著な傾向として現れるのは、古本系との一致度が高く、内閣文庫本Ｂとの一致度は低いということである。巻一の分析では、彦根城博物館所蔵『今昔物語』は、流布本系諸本（内閣文庫本ＡＢＣ、東大本乙）と古本系諸本（東大本甲、東北大本、野村本）の間の状態を有する希有な本であるということを指摘したが、巻四では、完全に古本系によった表記となっている。『今昔物語』巻二の本文では、古態本が鈴鹿本をかなり正確に書写していて、流布本系の表記と一線を画した。巻三の場合には、野村本は流布本の表記の影響を大きく受けていた。巻四においては、彦根本は古態本に属し、あまり流布本表記への揺れが見られない。

たとえば、巻四第二十六話の三一二1愚也では、古本は口偏が有り、流布本にはないのだが、口偏のある字を彦根本は使う。古い字体をそのまま使う意識が垣間見える。しかし、巻四第十二話の二九〇6　では、「不背カジズ」（底野）では、意味が通じないと考えたのか、「不背カシト」にしている。大系の注に「古本のこの本文は、旧表現「不背カズ」が「不背カジト」と推敲されていく過程を如実に示すものであろう。」とある通り、この表現は、古い形から新しい形への中間的な表記故に意味も理解しにくい。そうした場合については、理解できる表現に変えているかとも思われる。

これまで、彦根城博物館本は古態本と流布本の中間的な本として位置づけてきたが、巻四にいたって、古態本の表記を有することが判明したことにより、改めて、彦根本の位置づけを考えてみなければならないこととなった。今後、巻ごとの表記を丹念に分析することで、この一筋縄では読み解けない不思議な表記の書物をさらに、探求していきたいと考える。

注

1　中根「未紹介本『今昔物語』（彦根博物館所蔵）についての一考察」（『愛知県立大学説林』53号　二〇〇五年三月）

2　中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻一の本文の位置づけ」（『愛知県立大学文学部論集』54号　二〇〇六年三月）

3　中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻二の本文の位置づけ」（『愛知県立大学文学部論集』55号　二〇〇七年三月）

4　中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻三の本文の位置づけ」（『愛知県立大学文学部論集』56号　二〇〇八年三月）

5　本稿の中で引用した旧日本古典文学大系の校異は、『今昔物語集一』山田孝雄　山田忠雄　山田英雄　山田俊雄　岩波書店　一九五九年によるものである。

6　1の論文の中で、空白の量による諸本との一致度を分析した。

本論文は、二〇〇五～二〇〇八年度　科学研究費補助金　基盤研究(C)(17520123)「今昔物語集本文の享受史研究」の成果の一部である。